

販売しようとしたが引受手がないので、マルクスは二十五ポンド出して印刷させて自費出版した。この本の印刷中、夫人は痘瘡にかゝつて死線を上下したが、無事快癒した。しかし「醜くなつた顔、痘瘡それから眞赤な色とを以て」快癒したのだ。この病氣中、子供たちはリーブクネヒトの家へ避難した。夫人の病氣が癒ると、今度はマルクスの肝臓病が慢性から急性に變つた。これも幸ひに四週間後に快復したが、これがために借金はますます嵩んだ。マルクスは、伯父に金を借りるために、そして一寸ベルリンに秘密に寄るためにオランダへ旅行した。その間に、レンシエンも亦病氣した。

千八百六十年の初めにも、まだマルクス一家は貧窮と病氣にたゞられてゐたことを知ることが出来る。

最後に、マルクスとフェルチナンド・ラツサールとの關係を簡単に述べてみよう。

ラツサールは、千八百二十五年プレスラウで生れた。ベルリン大學で哲學を研究し、四十八年の革命には、ライン地方で運動に加はつて禁錮の刑をうけた。この運動のとき、ケルンにゐて新ライン新聞を發行してゐたマルクス一派の人たちの同志として活躍したが、マルクスと直接に接したことはすくなかつた。しかしマルクスとの間には、五十二年以來多數の手紙が交換されてゐる。

彼は、當時獨裁を行つてゐたビスマルク、それと對立するデモクラットの黨たる進歩黨に對して、労働者を代表して社會運動をこころみた。千八百六十二年にこころみた講演（後で労働者綱領として知られたもの）は、労働者階級に多くの共鳴を得た。六十三年五月、普通選舉を標榜する無産政黨「一般ドイツ労働同盟」を結成した。この同盟は、マルクス派とは對立の關係にあつたが、七十五年のゴータ大會で両者は合同して、ドイツ社會民主主義労働黨が成立した。

マルクス、エンゲルスとは、五十年代の初期から、手紙を交換し、お互ひに扶け合つたが、意見では度々衝突した。イタリー問題では、マルクスはプロレタリアの立場に立つて、いづこの國の立場も擁護しなかつたが、ラツサールは、フランスを助けてオーストリアの反動を討つべきを主張し、兩者の間に意見の相異を來した。この時のラツサールの意見は、彼の著「イタリー戰役」に示めされてゐる。労働者綱領に示され、ラツサールが運動にスローガンとした普通選舉、生産組合等についても、マルクスの意見はラツサールと異つてゐた。

ラツサールは、華やかな一時的な成功をよるこぶ芝居氣があり、またビスマルクに反對しながらも、ビスマルクと交遊して、労働者をうり渡す様な行爲も見えたので、マルクスは運動にいては、ラツサールと共にする意思はもつてゐなかつた。したがつて、六十三年に、ラツサールが、「ドイツの一般労働同盟」を組織したとき、協力を申し出でたが、マルクスはそれを斷つた。し

かし、私交の上では相互に扶け合つたらしい。経済學批判の出版について、ラッサールがマルクスのために骨を折つたとき、マルクスは非常に感謝してゐる。千八百六十四年八月、ラッサールが、戀愛のために決闘して死するや、マルクスは彼のために非常に惜しんだ。ラッサールが死んだ時、マルクスがいかに感じたかを知る二通の手紙を左に摘録しよう。

フライリヒトへの六十四年九月一日のマルクスの手紙。

『丁度今、僕はジェノアのクラブから一通の手紙をうけたが、それはラッサールが八月三十日にジェノアでワラキアの偽の公爵とやつた決闘のため、ひどい傷をうけ死にさうであるといふ悲報だつた。——僕は率直に白状するが、この知らせには全く心からうたれた。そして僕はすぐクラブカに電報をうつて、彼からラッサールに——もしラッサールが尙事切れてゐなかつたなら——僕に代つて僕の同情と悲憤とを述べてくれるやうに頼んだ。どうか、エンゲルスにもこの兇報を知らせて欲しい。』

ラッサールの古き、永き愛人ハッツフェルト伯爵夫人へのマルクスの手紙。

『ラッサール君の死に關する全く不意打の報知が、いかに私を驚愕せしめ、狼狽せしめたかはお解りのことと存じます。ラッサール君は、私の大に期待をかけてゐた人物の一人でありまし

た。最近我々の交りが絶えてゐただけ、なほさら私にとつては取り返しのつかないことです。……何人も私以上にラッサール君の急死について深い悲しみを感得るものはないといふことを確信せられたいと存じます。私は逝きしものがあなたにとつて何であつたか、また彼の死があなたにとつて何であつたかを知つております。たゞ一つ喜んで頂きたい。彼はアキレスの如くに、勝利のうちに、若くして死んだのです。』

第九章 第一インタナショナル

各國に於ける資本主義の發達は、世界を一つの有機的機構にまで固め上げる。世界の一部分に起つたことはかならず、世界の他の部分に何等かの影響をあたへずにはおかない。我々はすでにパリに起つた二月革命が各國の革命を誘發したことを見た。又カリフォルニア、オーストラリアの金鑛の發見が、如何にヨーロッパに影響したかを見た。また、アメリカの恐慌が如何にイギリス、フランス、ドイツ等の各國に波及したかを見た。資本主義の發達は、世界を一つの感じ易い全體にまで作り上げた。

千八百六十年、アメリカに南北戦争が勃發した。これは、奴隸制度、關稅問題、西部植民等の諸問題に關する、工業を中心とする北部諸州と農業を中心とする南部諸州との利益の對立より發生したものである。

ラッサールの斡旋によつて、六十一年からウィーンの「デイー・プレツセ」紙に寄稿することとなつたマルタスは、十月二十五日の同紙に、「北米の内亂」と題する論文を寄せてゐる。それ

の劈頭はに次のごとく書かれてゐる。

「半年の餘りも北米大共和國を舞臺とするところの戰亂は、いまや、すでにヨーロッパに反作用を及ぼし始めてゐる。この紛亂によつて自國商品の市場を失ひつゝあるフランスや、奴隸諸州の棉花輸出の停頓により自國産業の部分的破滅に陥らんとしてゐるイギリスは熱病的緊張をもつて、合衆國に於ける内亂の進展を追窮しつゝある。ヨーロッパ、否、アメリカ人みづからでさへ、最近にいたるまでは、平和的解決の可能を疑はなかつたのであるが、しかし戰亂はますます廣範圍に及び、次第々々に北米の老大な諸領地に傳播し、そして、それは、長くつゞくだけ、この世界部分（ヨーロッパ）をも、また恐慌をもつて脅しつゝある。イギリスとフランスとは、まづ最初に、これに襲はれ、そして震撼せられるであらう。そしてイギリス及びフランスの市場の恐慌は、同様に自餘のヨーロッパ諸市場に反作用するであらう。だから、歴史的關心は別とするも、吾々は、かの大西洋のかなたに於ける出來事の原因・意義および範圍について知らうとする極めて積極的な關心をもつものである。」

南北戦争のかゝるヨーロッパへの影響は、材料としての棉花の供給を唯一にアメリカに仰いでゐたヨーロッパ諸國の紡績業に大なる致命的の打撃をあたへた。イギリスでは、「棉花の加工に

よつて生計を立ててゐる人口の数は、スコットランドの全住民数よりも多く、アイルランドの今日の住民数の三分の二よりも多い。すなはち、千八百六十一年の調査によれば、スコットランドの人口は三、〇六一、一一七人で、アイルランドは尙ほたゞ五、七六四、五四三人であつたが、イングランドおよびスコットランドに於いては四百萬人以上が、直接または間接に、木綿産業によつて生活をしてゐるのである（マルクス、北米の内亂）。フランスでも、ドイツでも、その他のヨーロッパ諸國でも、遠くロシアでも、棉花を材料とする産業を經營し、またはその經營に雇傭せらるるものは多數であつた。従つて、アメリカのこの棉花不作は、それらの諸國の産業をどしどし倒した。それとともに數十萬、數百萬の勞働者、獨立小生産者が失業者となつて街頭に投げ出された。

このことは、各國の勞働者、ことにイギリス、フランスの勞働者をして、發達した資本主義のもとでは、彼等相互の利害關係がいかに密接に關聯してゐるかを自覺せしめた。勞働者の利害の國際的關聯が、彼等によつて認識されたのだ。

千八百五十七年の恐慌は、再び各國の社會運動を盛ならしめた。イギリスでは、千八百五十二年にはチャーティストの指導者オーコンナーが精神異狀を來し五十五年に死亡し、五十四年には中央委員會の改選すら行はれずして、千八百五十八年にはチャーティスト運動は消滅した。それ

に代つて勞働組合運動、協同組合運動が盛となつた。千八百五十七年の恐慌では、ことに建築業の打撃をかうむるもの多く、建築勞働者に對する資本の攻勢の苛酷に對して、建築工は、五十九年と六十一年に總同盟罷業を起して資本に對抗した。この罷業を指導したのは、デー・オツジャ、ダヴルユ・アール・クリマー等の屬するトレード・カウシナル（千八百五十八年グラスゴー千八百六十年ロンドンに設立）であつた。

フランスには、ブルードン黨の勞働者が、あるひは經濟闘争を、あるひは革命的騷擾を主張しつつ活動してゐた。

棉花不作より生じたヨーロッパ企業の打撃を原因とする兩國勞働大衆の困窮に對して、兩國の勞働者は、對策委員會を形成し、相互に意見を交換し、提携した。

千八百六十二年の、第三回萬國博覽會の時には、フランスの勞働者が、フランス政府補助のもとに、三百五十人ロンドンに渡り、そこで、兩國勞働者は、相會する機會をもつた。

かくして、フランス、イギリス兩國の勞働者は、かゝる機會から、相互に接近したが、それはいまだ國際的團結をつくり上げようといふ具體的な計畫にまでは進んでゐなかつた。

ところが、かゝる計畫が具現する機會が、間もなく來た。

千八百六十一年三月十九日に、ロシア皇帝アレキサンデル二世は農奴解放令を出して農奴を開

放し、農奴は直ちに自由村落階級の市民権をうけ、地主の手を離れて、直接ロシア政府に属することとなり、村落自治體（コムニューン）を組織した。このコムニューンが中心となつて、千八百六十三年にはポーランドに獨立を企圖する叛亂が起つた。それに對して、ロシア政府は、苛酷なる彈壓を行つた。

この彈壓に對して、イギリスの「トレード・カウシクル」が立つた。そして、この際、國際的労働者大會が開催されるべきを主張した。千八百六十三年七月二十二日、フランス、イギリスの労働者が、セイント・ジエームス・ホールに集合して、ポーランド彈壓反對、ポーランド獨立運動擁護の大會を催した。議長はマルクスの友人、ロンドンの歴史學教授ピースリーであつた。カウシクルの指導者たる前記オツジャー、クリーマーと、フランスの労働者代表トレインが演説した。トレインは萬國労働者の結合の必要なる事を力説した。その翌日に兩國労働者とポーランド、ドイツの労働者のみの會合が開かれ、その席上オツジャーが、労働者の國際的な團結を組織することを提唱した。この會合の決議によつて、國際的結合にフランスの労働者が参加することを誘ふ文章がフランスに送られ、それに對するフランス側の返事は、その代表者が携へてロンドンに來り、千八百六十四年九月二十八日、ロンドン・セイント・マーチンス・ホールで、イギリスの労働者と相會して、フランスも國際的團結に参加すべきことを承知し、具體的な案として本部をロンドンに置き、各國首府に支部が設置されるべきであることが決定せられた。このセント・マーチンス・ホールの會合をもつて、第一インタナショナルが創立せられた。

この創立大會には、マルクスは招待客として臨んだ。その大會のことを、マルクスは、次のやうにエンゲルスに報告してゐる。

『少し以前にロンドンの労働者はポーランドのためにパリの労働者に書面を送つて、此の問題について行動を一緒にせんことを促した。パリの方でも代表者をよこしたが、その先に立つて來たのは、トレインといふ名前の労働者で、此の前の選舉にパリで労働者の候補に立つた快漢だ（彼の同伴者達も全く愉快な若者達だつた）。千八百六十四年九月二十八日に、セント・マルチンス・ホールで公の會合を開くことが、オツジャー（靴工で、全ロンドン労働組合の此所の評議會及び特にブライトと聯絡のあつた労働組合選舉激勵協會の議長）及び石工で石工組合の書記クリーマーによつて布告された。（是等二人は、ブライトの指揮の下に、北アメリカのためにセント・ジエームス・ホールで労働組合大會をでつち上げ、同様にガルバルチ宣言もでつち上げた男だ。ル・リュベスといふ者が僕の所に派遣されて、僕がドイツ労働者の爲めに大會に助力し、特に一人のドイツの労働者を辯士として出してくれなにかといふこと等を頼みに來た。僕はエカリウスを出したが彼は立

派にやつてのけた。そして僕は黙り役として演壇の上で彼を助けた。ロンドン側からもパリ側からも、今度は眞實「列強」風を吹かしたといふことを僕は知つた。だからかくの如き招請は何れも拒はるといふ僕の従來の規則に従つて棄權することに決めた。(ル・リュベスといふのは三十代の若いフランス人だが、ジャーシーとロンドンで育つて、立派に英語を話し、フランスとイギリスの労働者の非常に好い仲介者だ。音楽の先生でフランス語も教へてゐる。)

大會は、窒息する程ぎつしり詰つて居たが、(それは今明かに労働階級の復活が起りつゝあるからだ) ウォルフ少佐(サーン・タキシス、ガリバルジの副官)がロンドン・イタリア人労働者協會を代表した。國際労働者協會を創立し、その總評議會をロンドンに置くこと、及びドイツ、イタリア、フランス並にイギリスの諸労働者協會を「仲介」すべきことが決議された。大會で假委員が任命された。イギリスからはオツチアー、クリーマー、其他一部分舊チャーチスト、舊オウエニスト等から多數、イタリアからはウォルフ少佐、フォンタナ其他のイタリア人、フランスからはル・リュベス其他、ドイツからはエカリウスと小生。委員は随意に人々を勧誘する權限を與へられてゐる。」

マルクスは、このインタナショナルの創立には、何等活動しなかつた。彼は十一月にワイデマリエルに與へた手紙の一節では、

『僕は長年あらゆる組織に參與することを系統的に拒絶し來つたけれども、此度は僕はそれを引受けたのだ。何故なら、大いに活動することの可能なる歴史が問題だからである。』
と言つてゐる。

マルクスは、千八百五十三年、共產主義者同盟解散以後、運動や組織からは退いて、もつぱら研究と資本論の執筆とニューヨーク・トリビューン、ウィーンのブレッツセその他の諸新聞への寄稿等の書齋と圖書館での生活をしてゐた。その間に彼は貧困と家庭問題その他の多くの不幸を経験した。子供を失ひ、千八百六十三年十二月には母を失つた。マルクス自身も度々肝臟病やら疔に苦しんだ。六十三年十二月二日のエンゲルスへの手紙の一節。

『二時間前母が死んだといふ電報が來た。運命の神が家から一人ねらつてゐたのだ。私自身すでに片足を棺桶に突込んでゐた。目下の状況ではとも角母よりも私の方が必要だ。』
かゝる間に、マルクスは、しかし、決して運動との關係を全然斷つたのではなかつた。彼は、昔からの共產主義の同志エカリウス、レスネル、リーブクネヒトと常に往來し、それらを通じてロンドンのイギリス労働者たちとも交つてゐた。チャーティストの機關紙「ピープルス・ベーパー」に寄稿したり、労働者の會合に出て講演をしたりして、斷えず運動の空氣には觸れてゐた。なければ、インタナショナルの創立大會に、クリーマーによつて招待されたり、演説を頼まれ

たりすることはなかつたであらう。その點では、エンゲルスが二十年の間運動から全くはなれて商會の經營にたづさはつてゐたりしたのとは違つてゐる。

このインタナショナルは、第一回の委員會（マルクスも出席）で、國際労働者協會（インタナショナル・ウオーキングメンス・アツツシエーション、インテルナチオナーレ・アルバイテルアツツチアション）と命名された。

その後、數回の委員會、副委員會を経て、マルクスの執筆によつて、協會の規約及び細則が出来た。この規約について、イタリーのウオルフ少佐はマツチニの主張を入れんとし、ウエストンはオーエン主義の主張を入れんとして策動したが、結局マルクスの意見が決定的となつた。その代り、マルクスは、多くの派の労働者を包容するためには、規約の起草にはかなり骨を折つた。「僕の提案はすべて副委員會で承認された。たゞ僕は規約の序言のうちで『義務』及び『權利』といふ二語、同様に『誠實道德及び正義』といふ語を採用しなければならなかつたが、それはすこしも害をなさない様に配置された」とエンゲルスに通知してゐる。

この規約は、委員會で満場一致の賛成を得た（これについては後で述べる）。

先づ、九月二十八日の創立の日、エカリウスによつて代讀されたマルクスの「國際労働者協會創立の辭」について述べよう。

『千八百四十八年から千八百六十四年に至るまで、未曾有なる産業の發達と商業の増大があつたにも拘はらず、労働階級の困窮が、その期間において減少しなかつたといふことは、極めて大切な事實である。』

千八百五十年、英國ブルジョアジーの保守的一機關たる消息通の一新聞が豫言した。英國の輸入と輸出が五十パーセント増加するなら、國內の貧民は消失點まで減少するだらうと。しかし、事實は反對で、「いたる所、労働階級の大群は、すくなくとも、上流階級社會が社會層を昇るのに比較して——いよいよますます窮境に沈むのである。』

『千八百四十八年の革命の流産の後、歐洲大陸に於ける労働者諸黨の、總ての團體と機關紙は皆な假借なき暴力の行使に依つて鎮壓された。進歩的な労働の子等は皆な失望して大西洋外の共和國に逃れ、そして短命な自由の夢は、産業的熱病時代と、道德的沈滞時代と、政治的反動時代の中に消え去つた。大陸の労働階級——それは或る部分に於いて、英國政府の外交から援助されて居り、そしてその英國政府は、當時も今日と同じく、セント・ペテルスブルグの内閣と密接な提携を爲して居たのだが、——そこでその労働階級の敗北は、直ちにその傳染的影響を海峽のこちら側（即ち英國）に及ぼした。英國の労働者は、大陸の兄弟の敗北に落膽して、自力の信仰を失つたが、その敗北が一方には、先に稍や動搖した、地主と金持の自信力を更に

回復させた。彼等は厚顔無恥の態度を以て、既に公表した特許権をも取消した。新らしい金儲の發見はおびたゞしい移民を生じ、それが英國のプロレタリアの陣列に再び補ひ得ざる間隙を残した。先に最も精力的であつた、殘餘の労働者も、今は一時的の厚遇と高給との餌に腐敗させられて、「現状を考慮に入れ」つつ活動した。従つてチャーティスト運動を回復し或は再組織しようとする總ての計畫は全く失敗した。労働階級の機關紙は大衆の支持を失つて順次に滅亡した。實際、英國の労働階級は、以前とはまるで違つて、今陥つてゐる所の、政治的無力の地位を以て、全く満足してゐるもの如く見えた。若し以前に、英國の労働者と歐洲大陸の労働者との間に、何ら行動の共通性が無かつたとするならば、今ではそこに、とにかく、敗北の共通性だけがあつた。たゞこの間に於いて、二つの成功を贏ち得た。十時間労働法案と協同組合工場とである。『故に、労働者の團結することが、今や労働階級の大義務である。そして彼等は既にそれを理解したと見えて、英、佛、獨、伊の諸國に於いて、同時に復活的興奮の徴候が現はれ、労働者黨の政治的結成が、今その諸國內に計畫されつゝある。』

労働者は成功の一要素を持つてゐる。彼等の大數がそれだ。然し大衆は、組織を持たされ、聰明な指導を與へられた時にのみ、初めて強壓の力を生ずる。從來の經驗の示す所に俵れば、同胞兄弟の團結——それに依つてこそ、諸國の労働者をあらゆる自由の戦ひに結合せしめ、相

依り相助けるの心情を激勵するのであるが、その團結を輕視したことが、いつも無秩序な行動の失敗を招いて、労働者に對する刑罰となるのである。かくて、この事態の認識に迫られて、千八百六十四年九月二十八日、諸國の労働者がセント・マルチンス館に公集會を催して、今ここに國際協會を設立したのである。』

この設立の辭は、かくして、労働者の國際的團結による闘争の必要を力説して、最後を、共産黨宣言と同じく、「世界の労働者よ！團結せよ！」と結んでゐる。

國際労働者協會の規約は、總則の部分と、細則の部分とに分たれる。マルクスの提案になる精神は、いく度も修正のち、千八百七十一年マルクスによつて執筆された。そのうち、總則の部分は次のごとくである。これによつて、この協會の態度を明確に知ることが出来る。

『労働者階級の解放は、労働者階級自身によつて獲得されねばならぬこと。』

労働者階級解放のための闘争は、決して階級の特權及び獨占のための闘争に非ずして、平等なる權利及び義務のため、一切の階級支配の打倒のための闘争であること。

労働手段、即ち生活の源泉の所有者の下に労働者階級が經濟的に屈從してゐることが、一切の形態の隷屬——社會的貧窮、精神的萎縮、及び政治的屈從——の根柢をなしてゐること。

従つて労働者階級の経済的解放が終局の大目的であり、一切の政治運動は手段としてその下に置かれること。

此目標に向けられた一切の試みは、従来は、各國內に於ける多様な労働部門間における團結の缺如と、諸國の労働者階級間における友愛的團結の存せざりしために失敗に歸したること。

労働者階級の解放は地方的、一國的問題に非ずして、近代的社會の存するすべての國々を覆ふ社會問題であり、その解決は最も進歩せる國々の實踐的、理論的協力に懸つてゐること。

ヨーロッパの諸工業國において今や再び新に興りつゝある労働者階級の運動は、新らしき希望を呼び起しつゝ、同時に、古き誤謬の反覆に對する嚴かな警告を與へ、且つ未だ聯絡なき運動の即時結合を急ぎつゝあることを考慮して、

國際的労働者協會は、これ等の理由から創立せられたのである。

國際労働者協會は、

國際労働者協會に屬するすべての團體並びに個人は、眞理、正義及び徳義を、相互間の態度ならびに人種、信仰、國別を顧慮することなく一切の人類に對する態度の原則として承認し、權利なき義務はなく、義務なき權利なしと宣言する。」

以上のごとき綱領と目的とをもつて、ここに國際労働者協會が誕生したのである。

翌年この協會の第一回大會が開かるべきであつたが、準備とゞのはずして、協議會の形式で、ロンドンに開催された。イギリス、フランス、スイス、ベルギーの代表が出席したが、ドイツはロンドン、スイス在住のドイツ人の外外國からは加はらなかつた。それは、「ゾチアールデモクラート」事件のためである。

ラツサールが、千八百六十四年カール・ジュの森で決闘に倒るるや、その遺言によつて、ベルン・ハルド・ベツケルが、一般ドイツ労働者同盟（ラツサールの創立したるもの）の會長となり、シュヴァイツェルは實權を握つて、六十四年ベルリンから「ゾチアールデモクラート」といふ同盟の機關誌を發刊し、それについて、マルクス、エスゲルスの援助を求めするためにマルクスの友人リーブクネヒトを記者の一人とした。ところが、同盟の態度は、ラツサールの戦術と同じやうにビスマルクに近づく態度を採つたので、リーブクネヒトとシュヴァイツェルの間に意見の衝突を來たし、つづいてマルクス、エンゲルスの絶縁の聲明となつた。兩人は、六十五年二月二十四日聲明を發して、我々は「内閣及び封建絶對主義的政黨に向つても、すくなくも進歩黨に向つてすると同じやうな勇敢な言辭を用ゐることを繰返して要求した」が、プロシヤ王國政府社會主義及

び、その瞞着に對してとつた「ゾチアールデモクラート」の用ひた戦術は、この上我々が同志に關係するを許さないものだ。それで絶縁する旨を宣明した。

これによつて、ドイツ本國よりの代表は、協會の協議會に出席しなかつたのだ。マルクスは先に、協會の規約を起草するに當つて、フランスのブルードン主義者、ブランキー主義者、イギリスの労働組合主義者、チャーティストの殘黨、ドイツのラツサール派等をも協會に包容するため、かなり字句の撰擇に苦心したことは、前に述べた通りだが、折角のその苦心も泡となつて、この事件を契機としてラツサール派の不參加となつたのだ。

マルクスは、千八百六十五年六月二十五日この協議會の總務委員會で講演した。それが後で出版された「價值と價格と利潤」である。

協會の第一回大會は、六十六年スキスのジュネーヴで開會された。マルクスは、資本論執筆のために出席しなかつたが、彼の起草にかゝる四つの決議は、總務委員會の名によつて、大會に提出され可決された。四つの決議とは、標準労働日、幼少年労働、協同組合、労働組合に關する決議である。そのうち、後の二者に於いて、社會運動としての兩組合のマルクス主義的意義を知ることが出来る。

千八百六十五年には、プロシヤ、オーストリアの間の危機が切迫してゐた。エンゲルスの「プ

ロシヤ軍事問題とドイツ労働者黨について」は、この時に、かゝれたるものである。この危機は六十六年に勃發した。

協會の第二回大會は、六十七年ローザンヌで開かれた。マルクスは出席しなかつた。この年、マルクス多年の苦心の結晶たる不朽の名著「資本論」が出版された。

稿を起してより十五年、貧窮と不幸と多忙とに追ひまくられながら、苦心に苦心を重ねた大作も、「エンゲルスとウォルフ」との温かい財政的援助をうけつつ、つひに完成した。六十六年十一月十日の手紙で「來週草稿の最初の小包がマイスネルの處へ出立する」と言つてゐる。マイスネルはハンブルグの出版屋である。翌六十七年四月、残りの原稿をたづさへてマルクスは汽船でロンドンを立ちハンブルグに向つた。この報をきいたエンゲルスは、次のごとき手紙を送つた。

「萬歳！ 第一巻が完成した。そして君がすぐさまそれを抱へてハンブルグに行くといふ文句が、白紙の上に黒々と書かれてあるのを遂に讀んだとき、私は制し切れなく萬歳とさげんだ」
マルクスは、ハンブルグからエンゲルスに答へた。

「僕は到着後直にマイスネルを訪問した。彼はその名の通りに——多少ザクセン訛があるが——快活な男である。暫く相談して萬事滞りなく済んだ。原稿をすぐに出版社に持つて行つてその金庫にしまひ込んでくれた。二三日中に印刷がはじまりどん／＼はかどるであらう。そ

れからまた吾々は會談した、そして彼は、僕と昵懇になつたことの非常な「歡喜」を表明した。彼は、いま三卷にわけて出版するつもりである。即ち僕が以前に目論んだ通りに最後の卷（歴史的文献的部分）を縮少することに對して、彼は反對する。彼はいふ「出版業者の立場からまた「一般の」讀者大衆のことを考へて、自分はこの最後の卷に最も多くを期待する」と。ではその點に關しては君の意に従はうと、僕は返事した。マイスネルは、いつでも完全に吾々の意に従ふ人である。」

ハンブルグでは印刷工や校正者の技術が不充分なので、印刷は、ライプツヒで行はれた。マルクスは、マルクスの同情者であり理解者であるターゲルマンの所にしばらく「客」となつて、五月ロンドンに歸り、そこで六十七年八月十六日夜の二時に全校正を完了した。そして、名著資本論第一卷が、世の中に出たのだ。資本主義的組織を根本的に解剖して、ブルジョア經濟學者の恐怖となつた資本論が誕生したのだ。

協會の第三回大會は、千八百六十八年に、ブルツセルで開かれた。この大會で、マルクスの資本論を読むことを世界の勞働者にすゝめる決議が可決されたことは、注目すべきである。この大會で、土地、鑛山、交通機關についての共有問題に關するマルキシストと、ブルードニストとの抗爭が、前者の勝利をもつて決定された。この問題は、次の六十九年のバーゼルの大會でも論ぜ

られた。

このバーゼルの大會では、相續權の廢止問題を中心として、バクティン派とマルクス派との間に論争がもち上り、その争ひが長くあとまで、協會の癪をなした。

ここで、バクティンの事をすこし語らう。彼は、千八百十四年ロシアに生れ、モスコイで哲學を學び、ベルリン、パリではブルードンと交遊して、共產主義的無政府主義者となつた。四十年代の初期に、ベルリンでマルクスと會つた。それから六十四年まではマルクスと會はなかつた。ポーランド人煽動によりパリを追はれ、二月革命の時はドレスデンに暴動を起し、「千八百四十九年に捕へられた。ザクセンで起訴され死刑の宣告を受けたが、ザクセン王は何人をも死刑にする事を欲しなかつたので、千八百五十年に私はオーストリアに引渡された。尤も我が兩同志（レツケルとホイブネル）と私との三人は誰も赦免を乞ふなんて事は拒絶したのだが。次でオーストリアで起訴され、死刑を宣告されたが、オーストリア王が私を死刑に處せぬといふ約束をザクセン王にしてゐたので、私は千八百五十一年に更にロシアに引渡された。ロシアで六ヶ月間を要塞の中で過した後、私は千八百五十七年にシベリアへ流刑された。千八百六十一年にそのシベリアから逃走して日本に渡り、太平洋を起え、サン・フランシスコ、パナマ地峽、ニュー・ヨークを経て、千八百六十一年の十二月に遂にロンドンに到着した。彼處で私は私と同國人のヘルツェン

ヤオガレフと會ひ、彼等兩人を通じてマツチニと相知るに至つた。千八百六十二年には私はロンドンに滞在してゐたが、勿論マルクスに會ふなどはしなかつた。千八百六十三年の初めに私はポーランド革命への助力となるべきロシア革命の爲にスエーデンで活動するべくスエーデンへの旅に上つた。それから私はポーランドの海岸へ志す海路の一行に加つてゐた。私たちは、私たちが彼地へ運ぶイギリス汽船の船長に裏切られたので、追跡してくるロシアの軍艦から逃れるためには實に非常な困難を経ねばならなかつた。千八百六十三年の暮、私はスエーデンからロンドンに歸へり、又そこからマツチニと私の舊友アウレリロ・サイフとから貰つたあらゆる友人への紹介状をもつてベルギー、フランス、 스위スを経てイタリーへの旅に上つた。私はカブレラに居つてそこでガリバルディー將軍と知己になつた。——私は千八百六十四年の冬と夏の一部とをトスカナで暮して、千八百六十四年八月に又同じ國々を経てスエーデンに歸つた。——その頃私はマルクスからの短い手紙を受取つた。その手紙はまだ保存してあるが、明日私が私の住ひで彼に會つて欲しい、と頼んで來たのであつた。私は彼に承知の旨を返事してやつた。すると彼はやつて來た。そこで私たちは和解した。私はフローレンスに歸つて、此處で一冬を過した。そして千八百六十五年の春、そこからナポリへ行つて、千八百六十七年の九月迄、即ちジュネーヴに於ける第一回平和自由同盟大會の時迄、其處に滞在してゐた。私はマルクスと二三の手紙を取り交した。

それから私達は更に會はぬやうになつた。』(邦譯、バクレーン全集、第六卷、マルクスとの私的交渉三十三頁以下)

バクレーンは、スイス滞在中ブルジョア平和主義者の「平和自由同盟」のジュウネーヴ大會に出席しそれに加した。國際労働者協會のローザンヌ大會では、この同盟との加盟を決議したが、ブルツェル大會では、この決議を否決し去つた。バクレーンは更に同志とともに、「國際的社會民主主義同盟」を組織し、同盟として、協會に加盟を申し込んだ。この同盟は、バクレーンの思想を綱領とした、即時革命説を主張する團體であつた。條件とか、社會状態とかを考へずに、ルンペン、盜賊等を煽動して革命をおこすことの可能を信する熱情的な革命家の集團であつた。

かつて、バクレーンは、マルクスの缺點を批判して、(一)マルクスは理論一點張である。(二)「彼の絶對的、專制的學說に於ける自己崇拜及びそれに伴ふ他への憎惡」(三)「強權的共產主義者であり、國家によつてプロレタリアートを解放し再組織せんとする一人である」等の三點をあげて否難してゐる。このバクレーンを中心とする國際社會民主主義同盟が、マルクス主義による協會と合はないのは當然である。

協會の總務委員會は、この同盟としての協會加入を拒絶した。

かゝる從來のいきさつがあつたので、バトゼル大會では、相續權の即時廢止を主張して、マル

クス派と衝突した。

この兩派の主張の相剋は、その後の大會、協議會でも、規約變改問題やバクレーニンの解散を約束した同盟の秘密的存在の有無を中心として、しばしば行はれた。この兩派の對立は、千八百七十二年のヘーグ大會で、バクレーニン派が協會内に約に背いてセクト的存在をつづけたことを理由として、バクレーニン及びギニョーム除名を決議することによつて、協會内部の問題としては終了した。千八百七十四年にマルクス、エンゲルス、ラファエルによつて書かれた「國際労働者協會に對する陰謀」は、その時の記録である。

千八百七十年、プロシヤにフランス戰役が勃發した。マルクスの筆になる戦争反對の宣言が總務委員會の名に於いて發表された。それに於いて、マルクスはボナパルトとビスマルクとを攻撃し、この戦争をもつて第二帝政の弔鐘であるとした。最後は、

「イギリスの労働者は、フランス及びドイツの労働者に、同胞として手を差しのべつつある。この戦争が如何に轉向しようと、彼等は、萬國の労働者の同盟が遂に戦争を絶滅するであらうといふことを堅く確信してゐる。フランス及びドイツの輿論が同胞殺戮戰に投じた間に、フランスとドイツの労働者が互ひに平和と友愛の使節を交換するといふ事實——この偉大なる事實は、過去の歴史に於いて類例なきことであり、光明ある將來に展望を開くものである。この事

實は、經濟的の窮乏と政治的の狂氣沙汰を持つ舊社會と對立して、新社會の成立しつつあることを證明するものである。この新社會の國際的原理は、平和であるだらう。何故ならあらゆる國々に於て、同一の原理——労働——が支配するであらうから。この新しき社會の開拓者こそ實に國際労働者協會である。」

と結ばれてゐる。

戦争がおこるや、インタナショナルの各國支部は、戦争防止のために活躍した。それに對してフランスでは、ボナパルトが、虚構の事實、ボナパルト暗殺の陰謀といふ名をつくて、インタナショナル委員會の支部の家宅搜索と彈壓とを強行した。これに對して、協會の委員會は、五月三日強硬なる抗議的宣言を發した。マルクスの筆になるところのものである。本協會はすべて公然と行動すべきを規定してゐる。陰謀のときは、協會の全く排斥する所である。「協會の本質は秘密結社のあらゆる形態の可能性を排斥する。」

九月九日には、更に戦争反對の第二の宣言——マルクス起草——が發せられた。

普佛戰役は、フランス軍の大敗をもつて終つた。セダンの守り堅からずして、ボナパルト自らプロシヤに捕はれた。七十一年二月末、フランスはパリに城下の盟を餘儀なくされ、莫大の償金とアルサス、ローレンの割譲とをせまられた。第二帝政は、マルクスの豫言のごとく崩壊して、

共和政が宣言された。第二帝政の弔鐘だつた。普佛戦役は、ボナパルト専制の挽歌であつた。この敗戦に乗じて、パリの市民は立つて銃をとり、三月八日、無能にして市民壓迫を強行する、國防政府に對して叛亂を起した。三月十八日火ぶたは切られた。この市民軍の中には十三名のインテリゲンチヤナショナル員が指導的地位にあつて活躍した。このパリ・コンミュニオンは、七十二日の間パリを占領して、「中央政府の廢止、資本の沒收、土地・資本の分配」等の政綱をかかげて、一種の無産者獨裁を行つた。ベルサイユに逃げた政府軍は、五月に至つて勢を盛り返し、二十一日パリを逆襲した。市街戦の繼續すること一週間、コンミュニオンはつひに怨を呑んで崩された。

五月三十日、マルクスは、パリ・コンミュニオンに關するパンフレットを、協會の總務委員會席上で讀んだ。そして、それが、そのまま委員會の宣言となつて、「ヨーロッパおよびアメリカの全會員」に通告せられた。これが、あとで刊行された「フランスに於ける内亂」である。彼は、この宣言に於いて、パリ・コンミュニオンの歴史を詳述し、コンミュニオンをもつて、「もしコンミュニオンが、フランス社會の、全ての健全な要素の眞實の代表者であり、従つて眞實に國民的な政府であつたとせば、それは同時に労働者の政府であり、そして労働解放の大膽な選手としては、斷然として國際的であつた」とし、「以前の政治形態は、本質的に抑壓的であつたが、コンミュニオンは、徹頭徹尾膨脹性のある政治形態であつた。コンミュニオンの眞實の秘密はこれであつた。

すなはちそれは、本質的に労働階級の政府であり、收奪階級に對する創造階級の闘争の成果であり、その中に於て労働の解放が行はれ得たところの、遂に發見された政治形態であつた」としてゐる。

「そのコンミュニオンを有つた労働者のパリは、新社會の前驅として、永久に祝はれるであらう。その殉難者は、労働階級の偉大な心臓に祭られてゐる。歴史は、その絶滅者らを、その僧侶の一切の祈禱も彼らを救ふに由なき永久の刑架に、すでに釘づけにした。」

パリ・コンミュニオンの壊滅は、インテリゲンチヤナショナルの解體を急がせる結果となつた。フランスの協會員の多くはコンミュニオンの犠牲となつた。敗北後は、支部員たることすら禁止された。イタリア支部もつぶれた。イギリスでは、コンミュニオンについてのマルクスの宣言を中心として分裂し、創立以來の功勞者オツジャーも脱會した。ドイツでは、ラツサール派に對立してインテリゲンチヤナショナルを守つたリーブクネヒト及びアウグスト・ベーベルが、アルサス・ローレン併合反對のため収監された。

かゝる頽勢に向ひつつあつた協會は、千八百七十一年にロンドン協議會、翌七十二年にヘーグに第五回大會を開いたが、ともに、バクーニン派とマルクス派の内紛的論争、バクーニンの除名

等の内紛に終り、つひにエンゲルスは、協會の總務委員會をロンドンからニュー・ヨークに移すべきを提案し、可決された。千八百七十六年七月十五日、フィラデルフィアに、協會最後の會議が開かれ、それをもつて、第一インタナショナルは遂に崩壊の悲運に接した。

このインタナショナルの創立や前半には、エンゲルスはマンチエスターにあつて、何等關係することがなかつた。千八百六十四年の彼の父の死後は、父に代つてエルメンとともに、父の業を共に經營した。運動には何等關係がなかつたが、物質上、研究上マルクスを助けることが多かつた。資本論の校正をもした。資本論が出来上つたとき、マルクスはこの本の出来たのは君の御蔭だと厚く感謝してゐる。資本論出づるや、エンゲルスは、各新聞に七つの紹介、批評の論文を書いて、マルクスの業績を推奨した。千八百六十九年の七月に商業生活をやめたので、七十年にプロシヤフランス戦争に従軍することをマルクスにすすめられたが、種々の障害のために不可能となり、従軍せずして戦争批判を、ベール・メール・ガゼットに連載した。それが「戦役雜記」である。七十年九月ロンドンに來つて、インタナショナルに關係して、マルクスを助けて、インタナショナルの事務を助けた。二十年運動からはなれてゐたことは、同志の非難を買つたが、マルクスは常にエンゲルスを擁護してゐた。七十二年、七十三年には「フオルクス・シユタート」に「住宅問題」及び「ペクーニン主義者の活動」、「フオークト氏再論」を寄稿した。

第十章 晩年のマルクス

マルクスは、五十年の中ごろまでは、頑丈な體格と、丈夫な健康とを有してゐた。五十年の中ごろ、警視總監であつたシュテイーベルの調査書にあらはれてゐるマルクスは、身長五フィート十乃至十一ツオル、體格小柄にて肥つてゐた。顔色も健康であつた。ウイルヘルム・プロスの七十五年代のマルクス追想によるも、精力にあふれた顔相、赤い頬をもつ健康的な顔色を有つてゐたことを知ることが出来る。

しかし、ロンドン時代の貧窮、心勞、勉強等は、マルクスの健康をだんだん害つて行つた。五十年代の終りごろからは、遺傳の肝臓炎に苦しめられた。強度の喫煙は彼の呼吸器管を弱めて行つた。第一インタナショナルの間も、度々病に苦しめられたことは、前にも述べた通りである。

彼の健康の悪化と、社會主義者としての彼に對するブルジョアの憎惡とは、彼を時々「新聞」の上で殺したらしい。今世紀に於いて、世界のブルジョア新聞がレニンに對してなしたとおなじ

ことを、マルクスにもしたのだ。七十一年の終り頃のマルクスのエンゲルスへの手紙の一節には次のごとく書かれてゐる。

『前週の日曜日に、パリで発行されてゐる、ボナパルト黨の機關紙「ラヴニール・リベラル」が、僕の死を報道した。従つて、いろいろの送附物があつた。就中ドロロンケが、本日妻にあてて書面をよこした。またイマントが「ドウンデー・アドヴァタイザー」を送つたが、その中にも同じやうな莫迦々々しいことが書かれてゐた。』
ハンプルグの友人クーゲルマンに宛てゝも書いてゐる。

『とに角決して新聞の噂話を氣にしたり、又尙更のことそれに應答したりする様なことはしないで頂き度い。私自身も、イギリスの新聞が時々私の死を報告してもそのまゝにして居り、何等消息を與へずにゐる。私は私の友人を通じて私の健康状態を世間に報告してゐるやうに思はれるほど不愉快なものはない……』

インタナショナルの終りごろの心勞は、五十三年に至つて、マルクスの健康を甚しく悪くした。肝臓病のみならず脳病、風邪、神経病等にも苦しめられた。「僕には卒中の危険が大きかつた。そして今（九月）も尙ほ非常に頭を悩ましてゐる。」彼とエンゲルスの友である醫者グンベルト

の診断をうけた。それから時々診察をうけにマンチェスターのグンベルトの所へ行つたらしいことが、手紙に見えてゐる。

病身の彼は、運動の仕事をエンゲルスに任して、専ら靜養と資本論第二卷の執筆、資本論外國版の校正とに日を送つた。

千八百七十四年秋にはグンベルトのすゝめによつて、末娘エリーナーを連れて、カールスバード温泉に行つた。

『いまましい肝臓病が僕のからだで大へんに進行したので、僕はフランス譯の校訂をつづけることはどうしても出来なくなつた。それで非常にいやいやながらも、カールスバードへ行けといふ醫者の命令に服してゐる。歸つた後では僕はまた完全に仕事ができるだらうと人々は僕に保證する。そして仕事が出来ないといふことは、牛ではないどの人間にとつても實際死の宣告である。もつたないない旅行であり、もつたないない滞在だ。』

カールスバードに行く前に、彼は、疔や脳病や、不眠症のために春には海岸のラムスゲートへ行つた。夏はワイト島へも保養に行つた。

七十五年の五月には「ドイツ・社會民主主義勞働黨」（ドイツ社會民主黨）の前身が成立した。ドイツには當時二つの勞働黨が對立してゐた。一つはラツサール主義を奉ずる「ドイツ一般勞働

同盟一であり、他はマルクス主義を奉ずるリープクネヒト、ペーベル、アウエル等の「アイゼナツハ派」(千八百六十九年アイゼナツハに成立)である。前者はラツサールの死後シュヴァイツェルが會長となつたが、千八百七十一年春の失敗によつて會長より退いた。このことが兩黨合同の障害をなくした上に、七十四年の帝國議會には同数の議員を獲得したので、兩黨は漸次接近し五月の二十五―二十七日のゴータの兩黨合同大會で合同した。そして、一つの綱領を採用した。ゴータ綱領といはるるところのものである。この綱領にはラツサール派の色彩が濃厚であつた。マルクス、エンゲルスは、この合同には賛成であつたが、この綱領には反對であつた。そこで綱領の草案を見て、その一々についてマルクス主義的な鋭い批判を加へて、ブラツケに送り、ペーベル、リープクネヒト、アウエル等に見さした。これ「ドイツ労働黨綱領評註」で、後でエンゲルスが、マルクスの死後發表した時には、「ゴータ綱領批判」と題名を變へた。マルクスの批判は、大會では採用されず、草案が修正の後決定されたが、後年エルフルト大會では、綱領はマルクス主義的なものとなつて、マルクスの意見がそこで始めて採用された。

この年の夏も、マルクスは、カールスバードに保養に行つた。

七十六年、インタナショナルは解散を宣言した。マルクスの論敵バクーニンは、七十三年のジュネーヴ大會のち、イタリイに退隠し、七十六年七月一日、スイスのベルンで死んだ。淋しい

革命家の末路であつた。この年もマルクスはカールスバードに行つた。夫人も病氣になつて治つてからロスゲート海岸のマルクスを訪れ、保養をした。

七十七年に、エンゲルスの大著「アンティ・デューリング」が出た。これは、千八百八十七年初から、ライプツヒツと發行の「フオールヴエルツ」に連載され、翌年出版された。

これはベルリン大學の講師オイゲン・デューリングが、「三年前、突如社會主義の専門家として、また同時にそれが改良家として世に戦ひを挑んだ」のに對して、エンゲルスが、彼の思想をマルクス主義の立場から批判したものである。この「アンティ・デューリング」論の一部はマルクスの執筆になる。エンゲルスは、本書の序文で、

『ここにのべられた考へ方の大部分はマルクスによつて樹立されたものであり、きはめて少部分が私に依つてなされたのであるから、この私の叙述もマルクスに知らさずしてなしたのでないこと勿論である。私はすべての原稿を印刷前にマルクスに讀みきかせた。しかも經濟學に關する篇の第十章(「批判的學史」より)はマルクスによつて書かれたのであるが、唯體裁上の理由で遺憾ながら、私が多少削らなければならなかつた。特別な仕事に於いて相互に助け合ふのは以前の我々のならはしであつた。』

と言つてゐる。三月六日のマルクスへの手紙の一節でも「批判史のための長い勞働に對して深く

感謝す」と述べてゐる。

この年、マルクスはカールスバードへ行く代りにノイエナールに保養に行つた。夫人の病氣もはかばかしくなかつた。

七十八年になつて、マルクスの病氣は、ますます悪くなつたらしい。資本論の第二巻にとり入れられた最後の原稿は、この年の執筆であつて、それ以後は、病氣のために不可能となつたらしい。八十年、八十一年には、マルクス夫妻とも病床に臥してしまつた。末娘とレンシエンがもつぱら兩親の看護をした。

八十一年には、マルクスは、フランスとスイスへ旅行した。

同年末、妻イエニーの病が篤くなつた。しかし、イエニーは自制力が強いので、病篤くなつてからも、苦痛を顔に出さず、嬉し相にして政治を談じ、第一回ドイツ帝國議會の選舉に興じたといふことである。モダイン・ソートといふ雑誌に、ベルフォート・パックスといふ人がマルクスを論じてゐた。「僕はこの號を十一月三十日にすでに受取つたので、僕の親愛なる妻は彼女の生涯の最後の數日間を機嫌よくすごすことが出来た。」

十二月二日、イエニーは遂に死んだ。「僕の親愛なる、忘れ難き生涯の伴侶」はつひに死んだ。「彼女の力がそんなに早くなくなつたのは、大なる慰めであつた。最後の時ですら死との何等

の闘争もなかつた。だんだんと眠りに入つた。眼はいつもより大きく、美しく光つてゐた。」

「最後の瞬間まで完全なる意識を持つてゐた。彼女の最後の言葉は彼女のカールになされた。

最早何も言へなくなつた時、彼女は手を我々に押しつけて、微笑しようところみた。」(エリナー)

マルクスは病氣で、醫者から「禁足」されてゐたので、彼女の埋葬には参列することが出来なかつた。ごく親しいもののみが集つて靜に彼女を大地に葬つた。その時エンゲルスは、同志を代表して、感慨深き彼女追悼の演説をこころみた。

エンゲルスは、夫人の死んだ日、マルクスも亦死んだ! と言つた。この言葉は娘たちを怒らした。しかし、これは事實であつた。自分の痼疾に、さらに妻を失つた落膽が加つて、マルクスは二重に身體をこはした。

孤獨となつたマルクスは千八百八十一年の年末ロンドンを去つてワイト島のヴェントノールへ行つた。そこは「強い日光と乾燥した天氣」は例外で、「日中は寒くて雨模様であり、夜は暴風である」。呼吸器は、そのためによくなかつたが、睡眠だけはとれるやうになつた。「天氣がだんだん寒くなるし、腫れた頬にはよくないので」ヴェントノールを去つて南に向つた。パリに行き

そこからマルセイユにおもむいた。「マルセイユへの旅行は、リヨンの停車場まではすべて好都合だつた。夜中の十二時すこし前に到着すべきところ、やつと早朝の二時に着いた。多かれ少なかれ、僕はすべての毛布を用ゐたにかゝはらず、幾分か凍えた。そしていつもアルコールによる對策がそれに對する唯一の救済である。」

二月十八日セエド號でマルセイユを出帆して、二十日「廢頽の體」をアフリカ北岸のアルジールに上陸させた。が「疾風、暴風、豪雨、灼熱、寒暑の絶えざる變化」の爲に胸部の疾患を發した。そこで、アルジール滞在二十餘日にしてアルジールを去つて、マルセイユ、ニースを経てモンテ・カローに赴いた。そして、そこでも「輕微で、たゞ背部の左の方だけが、再び肋膜炎」となつた。慢性の氣管支炎もやつた。それから彼の長女イエニーの嫁げるパリ附近のアルジャントイユのロンゲ家の客となつた。「僕は早くベッドに入り、そしておそく起きた。日中の大部分は子供たち及びイエニーとすごした。そして、今まで、あらゆる天氣の好い時を、短い散歩にひやした。僕はアルジール、モンテ・カロー、もしくはカンヌに於けるある時よりも、すべてに於いて氣持よく感ずる。」

それから次女ラウラ（ラファルグ夫人となつてゐる）と共に、スキスに行き、ローザンヌを経て、ジウネーヴ湖畔のヴェヴェーなるオテル・ドウ・レマンで、「愚人の天國に於けるかのやう

な生活」をした。ロンドンを出てよりこれらの保養旅行は、ことごとくエンゲルスの友情の御蔭である。

九月マルクスは、パリを経て、再びロンドンに歸つた。そしてさらに、ワイト島のヴェントノールへ保養に出かけた。

千八百八十三年一月十二日、長女イエニーがロンドンで急死した。夫人の死につぐに、この愛娘の死は、病床にあるマルクスの心を致命的に打つたに違ひない。

『自宅以外のホテルにゐることはもう辛抱出来なくなつた。彼は翌日自宅に歸つた。そしてそこで彼は尙ほ二ヶ月生存をつづけることが出来た。一月二十四日には、マルクスは、エンゲルスと二時間散歩する事が出来た。しかし、眞面目な精神的な仕事の出来ないので、彼にとつて最大の苦惱であつた。二月には聲が嘎れてしまつたので、殆んど僅かしか話をする事が出来なかつた。氣管支炎が起り、喉頭炎となつたので、食物を嚥下する事が不可能となつた。そこへもつて來て遂に肺滲瘍がつけ加はつた。一般的な衰弱が加はつた。』（フォレンデル）

マルクスの生涯の親友、エンゲルスは、マルクスの死——それは千八百八十三年三月十四日午後つひに來た——を次のごとく記述してゐる。

「僕は六週間以來毎朝僕が町角を曲つて來るとき、カーテンが垂れ下つてゐるかも知れない、との死の懼れをいだいてゐた。昨日（三月十四日）午後二時三十分、彼の最もいゝ訪問時間に僕がやつて來た——家は涙に閉ざされてゐた。もう駄目だと思はれた。僕はどうしたのかと尋ね、事の次第を明かにし、そして慰めようとした。少しの出血があつたゞけだが、突然に卒倒したのでつた。どんな母親が、その子を見とるよりもよく彼の世話をした我々の老いた、健氣のレンシエンが昇つて行き、そして下りて來た。彼は半分眠つてます、私と一緒に下ささい、と。我々が部屋には入つた時、彼はそこに俯して居た。眠りながら、だがもはや起きることなく、脈搏も呼吸もまだあつた。二分間で彼は靜かになり、苦痛なしに眠るが如く息絶えてしまつた。」

三月十七日、マルクスが、夫人イエニーとともに土に還るべき日だ。彼の希望によつて、埋葬には何等の儀式も行はれなかつた。埋葬に立合つたのは、化學者シュルレンメル、動物學者レー・ランカスター、二人の女婿ロンゲ、ラファアルグ、そして友人リーブクネヒト、エンゲルスであつた。エンゲルスは莊重なる追悼の演説をこころみて、プロレタリア解放戦線に於けるマルクスの功績をたゞへた。

ハイゲート墓畔、マルクスは妻、子供とともに同一墓石のもとに葬られた。

マルクスが生涯の仕事として、貧窮と病苦にさいなまれながらも完成を期した資本論は、マルクスの生前に於いては、僅に一卷しか出版されなかつた。病氣のために、最後の原稿の筆を擱かざるを得なかつたのは、千八百七十八年のことであつた。生涯の友エンゲルスは、この遺友の原稿を編輯して、第二巻は千八百八十五年、第三巻の二冊は、エンゲルス自らの死する一年前、千八百九十四年に出版された。さらに、エンゲルスが資本論第四巻として、出版せんとしたマルクスの遺稿は千九百五年——十年の間に、カール・カウツキーの手によつて、「餘剩價值學說史」四巻として世に公にされた。

彼の死後、彼の遺志をつぐものたちによつて、生前に於ける彼の多くの秘稿が續々として發表された。今日、莫斯科なるマルクス・エンゲルス研究所は、初めはリヤザノフによつて、つづいてアドラツキーによつて、浩瀚なる彼の全集を發刊しつつある。そして、彼の世界のプロレタリアートに遺した理論は、いま世界幾千萬のプロレタリアによつて、力強く實踐に移されつつある。

ハリ・コンミュニオンをもつて、プロレタリア獨裁の先驅であるとし、プロレタリア抑壓者を、

歴史は、僧侶の一切の祈禱も彼等を救ふに由なき永久の刑架に釘づけにするであらう、と言つたマルクスの死後五十年ならずして、この豫言は、今日生々とした現實として、我々の眼の前に現實化してゐる。

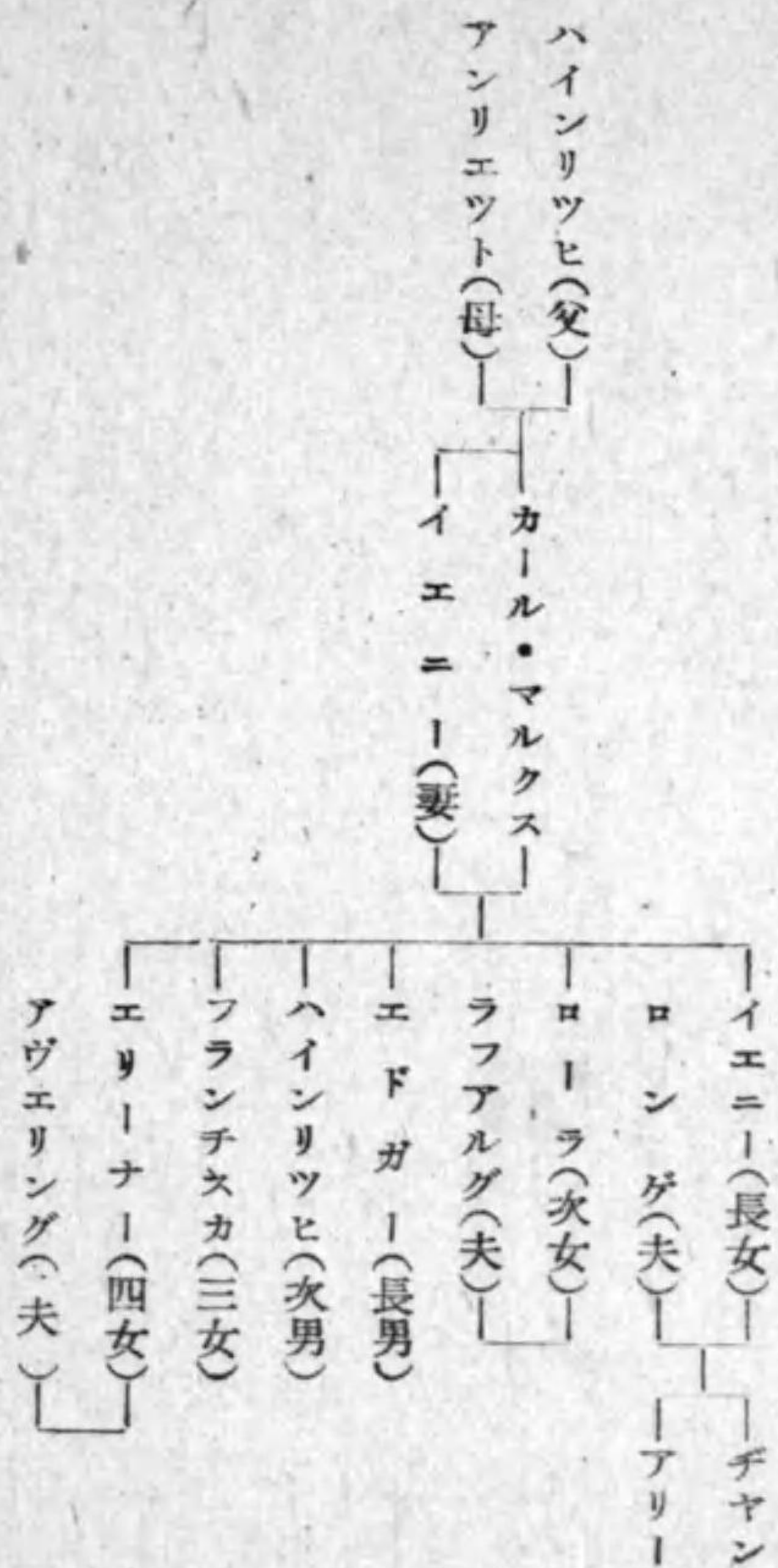
残されたエンゲルスも亦、その後、多くの重要な理論的著作と實踐とをなして、千八百九十五年八月六日つひに世を去つた。彼の遺骨は、同志四人の手によつて、灰となつて海に投じられた。

科學的社會主義の建設者マルクスとエンゲルスとは、かくして世を去つた。しかしそれから四十五年後には、後継者レニンによつてマルキシズムの國がロシアに建設された。

後 篇

第一章 マルクスの遺族

マルクスの遺族について述べるまへに、順序としてまづ彼を廻ぐる家族の大體のことを記るし
て置かう。それがためには、ここに極く簡単な系圖を書くのが便宜であると思はれる。



父のハインリッヒ(Heinrich)はマルクスが子供の時に大きな影響を與へた一人で、マルクスは父を平常尊敬する三人の聖者の一人に考へ、死んだ時にはその内ふところに父の寫眞を入れてゐた位であつたが、マルクスの二十歳の時(一八三八)死んだ。母アンリエット(Henriette)は特別に特色のある婦人ではなかつたが、賢母としてよくマルクスを愛撫した。マルクス四十五歳の時(一八六三)トリエールで死んだ。妻のイエニー(Jenny)はマルクスの父の親友ウエストフアーレンの長女で、兩人は子供時代からの遊び友達であり、伯林大學時代に許婚となり千八百四十三年すなはちマルクスが二十五歳の時にクロイツナハで結婚した。それ以來、彼の女は一生涯を通じてマルクスの良き伴侶であり、共働者であり、困苦を共にした。兩人の交情が常に濃かであつた事はマルクスが三冊の詩集を作り、それに「愛の書」といふ名をつけ、扉に「我親愛なる永久に愛するイエニー・フォン・ウエストフアーレンへ」と書いてイエニーに贈つた伯林大學時代の昔から(マルクス・エンゲルス全集第一卷リヤザノフの解説による)娘エリーナーを以て「二人は一緒に今一度若返つた。——母は戀する乙女に、父は戀する青年に、一緒に人生に歩み入る乙女と青年に——そして御互に生涯の別れを告げてゐる病める老人と死なんとせる老妻とではなかつた」(リーブクネヒトのマルクス追憶による)と言はしめた千八百八十年の晩年に至る迄、終始を通じて渝らなかつた。その良妻イエニーもマルクスに先立つて千八百八十一年十二

月二日倫敦の地で死んだ。エンゲルスは彼女の墓畔に立つて次の如き別辭を朗讀した。

『我友よ！ 我々が今や葬らんとする氣高きこの夫人は千八百十四年ザルツヴェーデルに生れた。彼の女の父、ウエストフアレン伯爵はやがて政府顧問官としてトリエールに移轉し、そこでマルクス一家と親しんだ。子供達は共に成長した。二人の天才（マルクスとイエニーを指す）も居た……。イエニー・マルクスは彼の夫の運命、仕事、闘争を共にしたのみならず、最高の理解と燃ゆるが如き情熱を以てそれに参加した。鋭い批判的悟性、政治的タクト、精力と性格の情熱、運動に於いて闘争の同志に示した犠牲を以て、四十年間に、一人のかくの如き女性がなした所のものは公には知られてゐないし、また同時代の如何なる新聞にも載せられてゐない。……若しこゝに他人を幸福にする事を最大の幸福とする女性があつたとすれば、それはこの女性であつた。』（ダンネンベルグのカール・マルクスに依る）

マルクスの敬愛した三人、父、母、妻は、彼を殘して先立つて行つた。マルクスは、しかし、また、前後四人の最愛の子供を失はなければならなかつた。彼と愛妻との間に、千八百四十九年に生れた次男ハインリッヒ（Heinrich）は翌年急死した。千八百五十一年に四女フランチスカ（Franciska）が生れたが、十一ヶ月で乳呑兒のまゝ死んだ。この時はまだ妻イエニーが生きて

ゐる時で、子供を埋葬する費用がなかつたために、方々借り廻つた揚句漸く埋葬する事が出来た。「この子は世の中に生れて來たとき搖籃を持たなかつた。そして又最後の小さい家（棺）もこの子に長く拒まれてゐた」と妻イエニーは書いてゐる。千八百四十七年に生れた長男エドガー（Edgar）も、千八百五十五年に死んだ。千八百四十四年に生れた長女イエニー（Jenny）は、パリ・コムミュンの闘士シャルル・ロンゲ（Charles Longuet）の倫敦亡命中これと結婚した。ロンゲはカルバドリーのケーンに生れ、千八百六十八年のペーゼルに於けるインタアナショナル會議に於いて演説した廉を以て一年の刑に處せられ千八百七十一年五月の有名なパリ・コムミュンではブルードン派を代表して、又コムミュンの機關紙公報（Journal officiel）の編輯者として参加したが、戦不利となるや倫敦に亡命し、そこでマルクスの長女イエニーと結婚した。ロンゲはその後クレマンソーと共に新聞「正義」（La Justice）を發刊し、千八百八十六、八十七、九十年に直つてパリ市會議員となり、千九百一年には義父マルクスの「コムミュン」の佛譯を試みた。千九百三年パリで死んだ。イエニーはロンゲと結婚して夫を助けたが、千八百八十三年一月、父マルクスに先立つ事二ヶ月に死んだ。ロンゲとイエニーとの間には數人の子供が生れたが、それについては後で述べる。

「マルクスは彼の家庭を何にもまして愛した」ウイナルスキーは言つてゐる。かくの如く愛した

る彼の家庭も、彼の死の直前に於いては僅に次女ローラと四女エリーナーの二人を残すのみとなつた。かくしてマルクスは千八百八十三年三月十四日永久の眠を眠つたのである。

私は更に筆を進めて、マルクスの遺族のことについて出来る丈詳しく述べて見よう。

マルクスの長女イエニーがロンダと結婚した事は先にのべた。彼女は父の限りなき哀悼のうちに父に先立つて死んだが、彼女とロンダとの間に出来た子供——マルクスの孫——は彼よりも長く生き残つた。その孫の中で我々が文獻で知り得るのは二人——アリー(Harry)とジャン(Jean)丈にしか過ぎない。ジャンは千八百七十六年五月十日倫敦で生れた。當時祖父のマルクスはまだ存命中で、このジャンを限りなく愛撫した。エンゲルスとリーブクネヒトが馬となり、マルクスが馭者臺となつて、ジャンがそれら三大社會主義者の上に跨り、「ユー・ノーティ・ホース」
「ゴー・オン・ブリュ・ヴィト」と怒鳴り散らす所はリーブクネヒトの追憶記の中で一番美しい場面の一つである。マルクスの子供好きは有名なものである。ステルンは「マルクスと子供」(Joseph Luitpold Stern, Marx und die Kinder)なる論文の中で、「併し彼は子供の愛人であり、その御伽話の話し手であり、その遊び友達であり、その馬であり、その吊棒である。……一つの繪がある。マルクスは怪物となつて床につく這ひ、背中の上や、手、足、ヒゲの邊りには子供の群が歡聲を擧げてゐる」と言つてゐる。この一つの繪とはおそらく、シヨルの筆になるマ

ルクスと子供といふ題の繪であらう。私は昔私の著書「闘争の跡を訪ねて」の中でこの繪を紹介したことがある。こんな御祖父さんに可愛がられたジャンは幸福な少年時代を送り得た事であらう。この腕白小僧のジャンとは誰あらう、今日フランス社會黨の一員として活動しつつあるジャン・ロンダその人である。ジャンは大きくなつて辯護士となり、「小共和國」(Petite Republique)の編輯者となり、ジャン・ジョーレスと共に雄筆を紙面に馳せた。後に「リューマニテ」(L'Humanite)が、S.F.I.O.の機關となるやその主筆となつた。千九百十四年には選ばれて社會黨議員となつた。ツールの大會——この大會でフランス共產黨が成立した——の後S.F.I.O.の機關紙として「民衆」(Le Populaire)を編輯した。多くの著書の中で有名なものとしては「フランスに於ける社會主義運動の進化」「國際社會主義運動」「社會主義辭典の第八卷」「マルキシズムの國際的政策」等がある。ここにマルクスとの間に一つの挿話がある。マルクスが彼の妻イエニーに詩を捧げた事については前に述べて置いたが、この詩集はマルクスの死後ラファルグの手に入り、ラファルグの死後は、このジャン・ロンダの所有に歸した。ジャンはこの祖父と祖母の戀のかたみを大事にしてゐたが、ある時、人に貸したまゝ遂にどこかへ行つて終つた。今日マルクスの詩として僅かに二篇だけが残つてゐるにすぎないが、もしこの詩集が発見されたら單にリヤザノフの喜のみではあるまい。

ロンゲとマルクスの長女イエニーとの子供乃ちマルクスの孫は、このジャンの外にアリーといふのがあつたが、これは千八百七十八年に生れて、千八百八十三年の三月二十日、乃ちマルクスの死後一週間にして死んだ。倫敦のハイゲート墓地にあるマルクスの墓碑の第三番目に「アリー・ロンゲ、彼等の孫」とあるのは乃ちこの子供の事である。マルクスの次女ローラ (Laura) はマルクスの生前ポール・ラファルグと結婚した。結婚後は英佛間を往復してゐたが、マルクスは死の直前ドラヴィユで圓滿なる家庭生活を営んでゐるラファルグ夫人ローラを訪ひ、共に瑞西に遊び、ゼネバ湖畔に六週間暮した。ローラの夫君ラファルグはフランスに於ける社會運動の闘士であつた。彼は千八百四十二年キューハのサンチャゴに生れ、五十一年フランスに來つて學生となり、共和及び社會主義運動に身を投じた。千八百六十五年リエージュで開催された學生の第一回國際會議に加はり、その後英國に渡つてマルクスの知己を得て、その次女ローラと結婚した。パリ・コンミュニオンに参加したが敗れてスペインに逃げ、スペイン社會黨の爲に力を盡し、それからロンドンに歸つた。千八百八十二年フランスに歸り、リヂユール・ゲートと提携して社會運動を始めた。千八百八十三年及び九十一年の兩度に亘つて、夫々六ヶ月、一年の刑に處せられた。千八百九十一年選ばれて國會議員となる。彼は更にフランス労働黨を確立し、千九百五年迄ゲートと行動を共にした。又多くの新聞にも寄稿した。Le petite Republique, l'Egalité, Petite

Socialiste, L'Humanité 等は彼の執筆した重なる新聞である。著書として有名なのは「怠惰の權利」「社會經濟論」「資本の宗教」「共產主義と經濟的進化」「歴史に於ける理想主義と唯物主義」「私有財産、その起源と進化」等である。千九百十一年十一月二十五日、子供なき淋しき家庭をうれへて、夫妻相携へて、ドラヴィユの別荘で自殺した。社會黨は黨葬を以て彼の死を悼んだ。

マルクスの三女エリナー (Eleanor) は始めフランス人のリッサガレイ (Lissangaray) と戀愛に陥つた。リッサガレイはパリ・コンミュニオンに加つた闘士で倫敦に逃げて、そこでエリーナーと近いた。リッサガレイはその後「パリ・コンミュニオンの歴史」を書いた人である。然しこの二人の戀は實を結ばずして破綻した。そしてエリーナーはその後英國人エドワード・アヴェリングと結婚した。彼等二人は千八百八十四年共に、チャンピオン、クレイン、ワッツ、ハインズマン、モリス等の運動家と共に、英國社會運動に積極的に参加した(ペーアの英國社會運動史による)。アヴェリングは千八百五十一年の生れで、始めは醫科大學の先生などをして居たが、その後、社會運動に身を投じた。多才な人で、論說、演說、作劇等に秀でてゐた。後年サミュエル・ムーアと共に分擔してマルクス資本論の英譯をこころみた。その際アヴェリング夫人エリーナーは、引抄の完全を期するために一切の引抄箇所を原文と對照し、従つて同書に於ける引抄の大

部分を占めてゐるイギリス文獻からの引抄については、ドイツ文よりの翻譯ではなくイギリスの原文を其儘用ゐるに至つた(資本論第一卷英譯文のエンゲルスの序文による)。エリーナーも亦夫に劣らず才能に恵まれてゐた。千八百八十三年五月號のプログレツス紙に彼の女は父マルクスの略傳を書いた。又ニュー・ヨーク・トリビューンに書いた父マルクスの論文を集めて「革命及び反革命」とした時、彼の女はそれに序文を書いた。この序文に於いて彼の女はマルクス一家が貧窮のドン底にあつた境涯を興味深く叙述してゐる。又マルクスが青年時代詩作に耽つた事實は彼が父に宛てた手紙によつて始めて判明したのであるが、この手紙が發表される前に、彼女はこの手紙の解説として一つの論文を書いた。それは「ノイエ・ツァイト」の千八百九十七年十月號に出てゐる。仲々の文章家であつたことは、彼女がリーブクネヒトの請に應じてマルクス晩年の家庭を書いた手紙を見れば明らかである。エリーナーは筆の人ばかりではなかつた。自ら社會運動の陣頭に立つを辭さなかつた。千八百八十九年にはパリの労働組合會議委員となり、千八百九十四年には社會民主同盟に参加した。又獨立労働黨の千九百九十三年に於ける創立にも寄與する所が多かつた。この夫妻は共に天分に秀でてゐたが、その共棲の生活は、あまり幸福ではなかつたらしい。十餘年の結婚生活後、エリーナーは遂に自殺して果てた。

かくしてマルクスの子供の中三人は病死し、二人は自殺し、後まで續くことの出来たのはジャン

ゲ夫妻の系統のみとなつた。従つて今日フランスの政界に活躍せるジャン・ロングのみがマルクス夫妻の唯一の孫である。

しかし、ここに血縁ではないが、その生涯をマルクス一家の爲めに盡した一人の忠實なる女性を逸してはならぬ。それは、レンシエンと呼ばれてゐたヘレネ・デムート嬢(Helene Demuth)のことである。

レンシエンは小さい時からマルクス夫人の實家たるウエストフアーレン家に仕へてゐたが、千八百四十九年の八月マルクスがパリを追はれて倫敦に行くや、レンシエンも家族と共にそこに赴いて、それから死ぬまでマルクス家の忠實なる下婢として働いた。彼の女の忠實はマルクスにもマルクス夫人にも、又多くの子供等にも愛慕された。そのみでない、故國を追はれた多くの社會運動家で、マルクスの家に入出入する者は皆、彼女の暖き精神上、物質上の恩顧をうけた。リーブクネヒトの如きは、金に困る毎に彼女から金をせびつてゐた。彼女の威令の前にはマルクスも頭が上らなかつた。リーブクネヒトは時々、マルクスと將棋を指すが、それをやる度にマルクスは神經を尖らし機嫌が悪くなるので、彼女はある時斷然と兩人に將棋を禁じたといふ逸話がある。マルクスが永久の眠につく時は、イエニー夫人は既にゐなかつたが、レンシエンは末娘エリーナーと三週間殆んど眠らずに、その最後を看護つた。「彼女は動かかなかつた。そして青年は走

り去つた。彼女は困窮と貧乏の下に、幸運のうちにも不運のうちにも留つてゐた。夫妻の死後はじめて安息が来た」。彼女の、心づくしの看護にも拘らずマルクスが長逝するや、その晩年をマルクスの畏友エンゲルスの宅に送り、のち安らかに死んだ。マルクス、マルクス夫人の希望によつて彼女はマルクス夫妻と同一墓碑の下に葬られた。「彼女は決して下婢ではなかつた。看護する人であり、助ける人であり、又女友達でもあつた」とヘンケルは言つてゐる。

傳記者の傳ふる所によれば、彼マルクスは非常に大好きであつたといふことである。しかしながら、マルクスの死後この「遺族」——彼の愛犬はどうなつたか、それについて筆者は残念ながら何ごとも知らない。

第二章 マルクスの學問的及び實際的活動の

背景としての私的生活

「マルクスは何にもまして彼の家庭を愛した」——ウキナルスキは彼のマルクス傳でかう言つてゐる。マルクスの學問的及び實際的活動の背景としての私的生活を述べるにあつて、先づ彼の家庭に對して簡單なる一瞥をあたへるのが順序であらう。私は前章で彼の遺族のことを述べるにあつてやゝ詳細に家庭のことについて書いたから、ここでは、ごく簡単に、出来るだけ他の資料によつて、筆をすゝめて行くこととする。彼の父ハインリッヒ・マルクスは法律家で辯護士をやり、裁判官を勤めてゐた。彼が生れてから大學時代までは、家の財産は決して乏しくはなかつた。これは父が嚴格で儉約家であつたせいもあらう。マルクスはベルリン大學時代、彼の愛人イエニーに對する悶へと哲學上の疑問に對する煩悶から、かなり亂暴な生活をしたので、富豪の子供ですら五百ターレル以上の學費を使はないのに、彼は七百ターレルも使つてゐたといふことがスベルゴの傳記に出てゐる。彼の父は彼に文學上及び哲學上の多くの影響を及ぼし、又生活上、

研學上、手紙を以て常に彼を鞭撻してゐた。マルクスも父に對してはすべてを打明けてゐた。當時彼が父に宛てた手紙を読む時には彼が父を如何に信頼し、父も亦彼のために、如何に寛嚴よろしく彼を指導したかが知れる。愛人イエニーに對する愛情を遠慮もなく父に書き送つてゐるところなどは、彼の後年の直截なる性格の萌芽を見せてゐる。

彼の母の事については、彼女の系統以外に、あまり詳しいことは知られてゐない。たゞマルクスに對してよき母であり、常に家庭の裡にあつて父を助け、マルクスを愛撫した事のみが知られてゐる。マルクスがベルリン時代の淋しい時に、常に故郷を思ひ、故郷に歸らん事を望んでゐた事によつても、父母に對する思慕の情が表はれてゐる。

マルクスは姉ソフイに次いで二番目の子供として生れた。他に兄弟もあつたが、その他の兄弟については一向知られてゐない。ギムナジウム時代は非常な秀才兒であつたが、一方又彼は亂暴なあばれ者——Wilder Toben 父の命名——であつた。「彼はその少年時代に於いては、普通の用語上の意義に於ける模範生徒では決してなかつた」といふウキナルスキの言は當らずと雖も遠からずであらうが、一方彼の卓越したる學識とその正しいと信する所に向つて直進する性格のために、この腕白兒も學僚から多大の信頼と愛とをかち得てゐたと言はれる。ボン大學、ベルリン大學時代には成績はあまり良くなかつた。彼は學校へは殆んど出席しないで、徹夜して自分

の好きな勉強をしてゐた。大學の終り頃になつて彼の將來がソッソッ首を出して、從來の學說や社會制度に對して反抗し始めたので、父母が非常に心配した。

彼の父は彼の二十歳の時、彼の母は彼が四十五歳の時死んだ。従つて父はマルクスが後年の反抗運動と貧窮とを知らずして易贖したが、彼の母は昔し彼女が「幸運兒」と呼んだところの、息子が、壓迫と貧窮の裡に席あたたまるの暇なきを見ながら死んだ。母の残した僅かの遺産によつてマルクス一家が餓をしのぎ得たといふ悲しい挿話はこのときのことである。

マルクスは三人の聖者を尊敬した。彼の父、彼の母、そして最後に彼の妻である。イエニー・フォン・ウエストフアーレンは、マルクスの一生を通じて、眞の意味の良き伴侶——Gefährtin——ラファアルグの言葉——であつた。兩人は子供の時から幼な友達であり、一緒に成長した。マルクス十七歳の時秘密に——マルクスは父に丈は明してゐる——婚約し、二十五歳の時結婚した。パリに行く前さ、やかなハネムーンを試みたが、後年この地忘れ難くて、娘を連れて再遊した事がある。彼女の實家は貴族で、彼の兄はプロシヤの大臣をした事がある位であつたが、彼女はマルクスを信頼し、一生涯を壓迫と貧窮と亡命の裡に暮して、死して後も尚ほハイゲートの墓地に共に眠つてゐる。マルクスに對しては良き妻となり、その學問的勞作を助けた。マルクスをして大成させたのは大半イエニーの内助の力である。困窮の裡に多くの子女を養育し、時には質

屋に走り 時には金借りにも奔走した。彼女はマルクスより四歳の年上であつたが、兩人の交情はマルクスが彼女に三冊の詩を贈つた昔から、最後に至るまで終始渝らざる愛情を示し合つた。マルクスは深い心服の情を以てイエニーと内部的に固く結合した。彼女の美しさと犠牲心は貧窮と勞作とに苦しむマルクスの心をどれだけやほらげた事であらう。この優しい心は、マルクスや子供達に對してのみならず、彼の家に集る多くの同志に對しても同様にそゝがれた。パリ時代に有名な詩人ハインリッヒ・ハイネは幾度かその詩稿を携へてマルクスの門を敲いた。マルクスは、例の直截な性格とそれに悪戯心も混つて時々彼の詩の悪口をたゝいた。ハイネはこゝろいふ時にはいつもイエニーの激勵と賞讃に慰められた。倫敦時代、マルクスの家は一數多くの四方八方への流浪の亡命客の飛び去り、飛び來る鳩の巢となつた。小さな鳥も大きな鳥も、そして最も大きな鳥もあつた。これらの鳥を暖い心で慰め、鼓舞したのはマルクス夫人であつた。リーブクネヒトはその追憶記の中で、彼が貧困と絶望の中で彼が貧困と絶望の中に死ぬのを脱がれたのは、マルクス一家の御蔭であるといつてゐる。イエニー夫人は、マルクスの死ぬ一年前に痲腫のために倒れた。彼女の最後の言葉は、「——, Karl, meine Kräfte sind gebrochen」[カールよ、我が力は挫けた]といふのであつた。

マルクスとイエニーとの間には二男四女があつたが、その中の三人は夭折した。残つた三人は

女で長女はシャルル・ロンゲに、次女はポール・ラファルグに、他はエドワード・アヴェリングに嫁した。だが長女はマルクスの生前に死し、次女はその夫と共に自殺し、アヴェリングの妻となつたエリーナーも自殺した。

マルクスは子供に對しては全く眼がなかつた。貧民の子供に會ふ毎に物をやり、だまされると知りつつも子供を連れて乞食に物を恵むことを、とどめることが出来なかつた。又自分の子供や孫と共に馬車遊や軍艦遊びをして、ハメをはずして騒いだり、御伽噺や歴史を話してやつたり、日曜には子供と一緒にハムステッド・ヒースに遠足したり、終生を通じて子供のよき相手であつた。ヨセフ・ルイトボルド・シユテルンはその論文「マルクスと子供」に於いて言ふ。「フランクツ・メーリングは餘剩價値の發見者を第十九世紀に於ける最も天才的な人と呼ぶ。しかしこの不朽の行爲——近代社會の經濟的運動法則の發見は、子供への洞察なくしては完成しなかつた」。かかる子供への洞察はマルクスの如きにして始めてなし得たであらう。

忠實なる下婢としてのヘレネ・デムートが、彼の妻と共に如何にマルクス一家にとつて必要な人物であつたかは、マルクスの娘エリーナーの次の短い一句によつて最も適切に言ひあらはされてゐる。「ヘレンは言はば一の軸で、その周圍を家の中の全てが廻つてゐたのである。」

マルクスの一生の生活は、壓迫と貧窮と勞作の生涯であつたと言つていい。從來の制度と學說に對して鋭い批評の眼を向け、それを直截に發表するを憚らなかつた。マルクスが至る所で官憲と資本家の壓迫をうけたことは不思議でない。パリからブルツセルへ、ブルツセルから倫敦へと彼は放浪の旅を重ねた。「私達は一ヶ月の間パリに滞在した。しかしこれも私達にとつては安息の場所ではなかつた。或朝のこと例の警部が、カルル及びその妻は二十四時間以内にパリを退去すべしといふ命令をもつて來た」——これは夫人の日記の一節である。倫敦は當時に於いて唯一の國際的に自由なる都市であつた。彼の後半生はこの倫敦で送られた。

彼は青年時代までは金には困らなかつた。しかし後半生は多くの家族を擁して生活と苦闘しなければならなかつた。

新ライン新聞時代(千八百四十八年)には妻と子供三人を擁して本當に食物のなかつた事すらあつた。倫敦へ移つてからも千八百五十年頃の彼は貧窮のドン底にゐた。子供に餓ゑさせない爲め自分は食べない事すらあつた。この時五磅の家賃支拂に窮して、赤坊の搖籃や玩具まで差押へられ、妻は嫁入の時持参した祖先傳來の銀の食器や匙を典した事は有名な話である。この間の事情はイエニーがワイデマイエルに送つた手紙に詳細に記されてゐる。千八百五十一年頃に彼は紐育トリビューンの寄稿家として一回五弗の原稿料を貰つたが、五弗で一家を保つ事は不可能な

で、その時子供が死んでも棺を買ふ金すらなかつたといふことである。この間の消息は、これら論文を集めて一冊とした「革命及び反革命」の初めにあるマルクスの娘エリーナー・アヴェリングの序文に明らかである。

この困窮を救つたのはエンゲルスであつた。エンゲルスは元來裕福の家に生れ、死んだ時にも二萬乃至三萬五千磅の遺産があつた位だから、マルクス程は困らなかつたので(Karl Walcker, Karl Marx による)陰に陽にマルクスを助けて居た。この間のマルクスの窮乏は彼が友人クイダルマンに宛てた次の二つの手紙によつて知られる。(林房雄君譯)

『千八百六十一年にはアメリカの内亂のために私の主要収入源泉であつたニューヨーク・トリビューンを失つて終つた。同志への寄稿は猶今日まで断えてゐる。それ以來今日まで、家族が路頭に迷はぬやうに切角内職をしなければならなかつた。私は實務家にならうと決心した。そしてその翌年の始には鐵道局に入る事になつてゐた。所が幸か不幸か、偶々私が惡筆であるために、そこへは採用されなかつた。』

——一八二六・一二・二八日の手紙——

『私の經濟状態は長らく病氣とそのため多額の入費とで、大層苦しくなつて來た。財政恐慌

が眼前に迫つてゐる。それが私及び家族に及ぼす影響は勿論のことだが、相當見榮を償はねばならぬこのロンドンでは、これは私を政治的にも破滅せしめるやうなものだ。折入つて御願したいのだが、千ターレルばかりを五六分の利子で少くとも二年間貸してくれさうな人を誰か御存じないだらうか。現在私は少額の金に對して二割乃至五割の利子を拂つてゐる。私はこれ以上債權者を威嚇する事は出来ない。かういふ譯で私の家の瓦壞が頭上に迫つてゐる。」

——一八六六・一〇・一三日の手紙——

しかし晩年には經濟状態も大分よくなつたらしい。それはエンゲルスの方も地位がよくなり、マルクスの著書も賣れる様になつたからであらう。

かくの如く困窮の谷にありながら彼は金錢に對しては頗る潔癖であつた。勞働者に對する連續講演、新聞への寄稿なども、一文も貰はずした事が屢々あつた。金錢に對して彼が潔癖であつた二三の例を挙げやう。千八百四十八年パリ滞在中、フロコンといふフランス人が、「新ライン新聞」に若干の金を寄附する事を申し込んで來た。それに對して「私達はドイツ人として、たとへそれが親密な關係にあるフランス政府からであるとしても、鏹一文の補助もうけることは出来なかつたのです」と言つてゐる（マルクスの自傳）。

それから有名なフォークト事件がある。千八百五十九年佛埃戰爭が起つた時に、マルクス一派は之に反對した。所がナポレオン政府下の要職にあつたカール・フォークトはマルクスのこの反對には何か不純の分子ありとて批難した。これに對してマルクスは「ヘル・フォークト」なる辯駁文を書いた。その後チューレリー宮殿の祕密がばかれた時、フォークトがフランス政府から四萬フランの金を貰つてゐる事が暴露されて、事件の曲直は自ら明白となつた。

マルクスの潔癖な事は單に金に對してのみならず、日常の生活の他の事にも及んだ。マルクスがブルノー・パウエルの慫慂をうけて博士論文を起草した時、パウエルはその通過のためにマルクスの妻の實家に頼めば官邊に縁故があるので、容易に通過するだらうとて何度もマルクスに勧め、又當時許嫁の關係にあつたイエニーにも告げたが、マルクスはこれを最後迄斷乎として拒絶し、ベルリン又はボン大學に提出する事を罷めて、イエナ大學に提出し學位を得た。

マルクスは強大な鐵の如き骨盤を有つてゐた。身長は普通より大きかつた、彼の肩は廣く、胸は張り、四肢は均整がとれてゐた。彼の健康は人並はづれて丈夫であつたが、四十年代の終りには身體の諸機能が故障を生じ始めた。不斷の勉強、貧困、營養不良、これらが彼の鐵の如き體を壞しはじめた。不眠症、肝臟病、悪性の潰瘍等に苦しめらるる事が多かつた。彼は最後には最愛の妻、長女に死なれて氣を落した所へ、肺炎を併發して遂に永久の眠を眠つたのである。生活に

對する苦勞がなかつたら、彼の夭折した子供達も、彼自身も、もつと長生することを得たであらう。

マルクスは又偉大なる頭腦を有してゐた。彼の腦は信ず可らざるほど多くの歴史的及び自然科学的事實及び哲學理論を以て武装されてゐた。そして永い間の精神的勞働によつて集積したこれらの知識及び觀察を使用する事を諒解してゐた。彼の頭腦は蒸氣をたいて港に碇泊する戦艦の如く、凡ての方面の考へに向つて出動して行く丈の準備がいつも出来てゐた。

彼の性質は小兒の如く眞情徑行、直截であつた。その間には何等の妥協を入れる餘地がなかつた。思ふ事はどしどし言ひ不正と思ふ事は徹底的にやつつけなければ承知が出来なかつた。其に彼は敵に對しては皮肉と諷刺の武器を有した。一面頑固の所と負けじ魂を有してゐた。彼が將棋をして敗けた時などはその残念がり方は人一倍であつた。彼はある時娘の間に答へて、闘ふ事は幸福であり、屈服することは不幸であると言つたが、これなどは彼の負けじ魂を示してゐる。彼は言行に遠慮せず、誤あれば徹底的に克服する性質を有してゐたので、彼は生涯の内で多くの人達と論争し、中にはそのために長い友情を中斷させた事も尠くなかつた。ブルノー・パウエル、アーノルド・ルーゲ、ブルードン、ウキルヘルム・ワイトリング、バクレーニン、ヘルツエグ、フェルチナンド・ラツサール、アレキサンダー・ヘレツエン等との仲違又は論争はその尤なるものである。

である。しかし彼は説を悪んでも人を悪まなかつた。パウエル、バクレーニンとの間の如きは、論争の後では嵐の跡の如く再び静かな交り續けてゐた。リーブクネヒトさへも感情の行違から少時相見ざることもあつたといふことである。

かくの如く彼は敵に對しては辛辣であつたが、又一方頗る濃かい情を有してゐた。それは彼の妻、子供、孫、デムートに對する愛情からでも判るが、又エンゲルス、ハイネ、ウオルフ、リーブクネヒト等に對して示した限りなき包容力を見ても明瞭である。又倫敦の鳩の巢に集まつたエカリウス、ブエスダー、フライリヒラート、シュラム、ロオラン、ジョーン、ハアネー、フロストなどの各國亡命者に對して示した愛情によつても證明される。

彼は氣短といふ缺點を有してゐた。しかしこれに對しては夫人、デムートが常に匡正を怠らなかつた。又彼は直情徑行であつたので、芝居氣やシャレ氣は大嫌ひであつた。倫敦にゐる時、ルイ・ブランが訪ねて來てシャレ氣を出してゐるのを見て嫌氣がさしたといふ挿話がリーブクネヒトの追憶に出てゐる。クーゲルマンへの手紙の中でも「マイヤーの百科辭典は、ずつと以前から私に小傳を書き送れと云つて來てゐるが、私はそれを送らなかつたばかりでなく、その手紙に對して一度も返事を出した事がない」と言つてゐる。自家廣告的の芝居を嫌つたのだ。又ある手紙では「獨逸のさる大學の一經濟講師が私に書を寄せて『私は全く貴説に敬服した。併し——併し

私の地位が他の同僚と同じくこの私の信條を發表する事を妨げる」と言つてゐる」旨を指摘してこの表裏ある行爲を非難してゐる。

マルクスは人並以上に勉強した。極度の貧困と壓迫の生涯で、あの大部な資本論はじめ等身の著作をなした事は單なる天才の仕事ではない。彼は自ら孜々として勉め、自らの生涯の像を刻んだのだ。彼は既に學生時代から徹夜の勉強を續けてゐた。倫敦時代でも彼は晝は訪問客に應待しながら、夜は熱心に夜を徹して勉強した。夜おそく會合から歸つても彼はすぐねずに食る如く勉強した。エンゲルスはこの時のマルクスを、「彼は飽く事を知らざる大食者の如く貪り讀んだ」と言つてゐる。彼の勉強する所は二ヶ所あつた。一つは彼の應接室兼書齋で、他は倫敦の大英博物館の圖書室であつた。前者は多くの小兒の騒しい中であつて泰然として本を讀み、筆をとつてゐた。「資本論」のノートを書き、「經濟學批判」を書き、「ブリュネール」を書き、ニユーヨーク・トリビューンへの寄稿を書いたのは皆この騒がしい部屋の中であつた。大英博物館にはその藏書の多數を以て世界有数の圖書館である。マルクスは倫敦滞在中殆んど毎日ここに通つて勉強した。彼は同館のリチャード・ガーネット氏の好意によつて幾多の便宜を得た。「その頃に大英博物館の壯麗な圖書室はその無盡の藏書と共と築かれた。——ここにマルクスは日目を暮らしたが

我々にも通ふ様に促した。學べ！ 學べ！ これは實に彼が我々に叫んだ至上命令であつた。しかしそれは又、彼の先んじての模範によつて示されてゐた」(リーブクネヒトの追憶、小椋氏譯)「他の亡命者は世界轉覆の計畫をねり、日毎夜毎に「明日は始まるぞ」の飲物に酔ひしれてゐる時——我々「悪黨仲間」、「盜賊」、「人間の屑」は大英博物館に座つて、自らを教育し、未來の戦のための武器を用意してゐた。」(同書)

マルクスは少年時代から、ラテン、ギリシヤ語等の古代語をよくした。晩年には獨逸語の外に英、佛語をマスターし、更に進んでロシア語、スラブ語、スペイン語をよくし、更にクリミア戦争の時にはアラビア語、トルコ語さへ學修しようと計畫してゐた。彼は常に曰く「外國語は人生の戦に於ける武器である！」と。

マルクスは文學に對しては異常の興味をもつてゐた。彼の父は彼にルソー、ボルテアアの智識を注入し、彼の妻の父は彼にダンテ、シエクスピア、セルヴァンテスを讀んで聞かせた。彼は青年時代詩作を試み、一時は文學を以て身を立てんとした事もあつた。彼は交友に多くの文學者を有つた。ハイネ、フライリヒラート、ヘルヴェグ等はその内の有名なる人達である。彼の好んだ作家はポール・ド・コツク、シャルル・ルヴェ、アレキサンデル・デュマ、ウォルター・スコット、セルバンテス、バルザック、ブーシユキン、ゴーゴル等であつた。ラファグの追憶によれ

ば彼は晩年、娘に、グラツカスを主人公とするドラマを書いてやる約束をしたが、これは果されず終つたといふことである。

マルクスは自然科学に對しても常に勉強を怠らなかつた。物理、化學の日々の進歩に對して注意してゐた。モシヨレット、リービツヒ、ハツクスレイ等の講義には常に出席してゐた。ダーウキンの進化論に對しても莫大なる價値を置いてゐた。又モアリンの「生理醫學講義」やトモレーの「萬物の起源について」を讀んだ事がクーゲルマンへの手紙の中に見えてゐる。高等數學をも勉強した。マルクスの考に依れば、科學は、科學が數學を利用するに至つて始めて眞に發達するのである。

彼の趣味としては、第一は文學書の購讀である。彼は殆んど毎日ダンテ、シエークスピア等の著作を手から離さなかつたとのことである。チエツク、チエツスも亦彼の好きな遊戯であつた。リーブクネヒトとあまり熱心に勝負を争ふので、ヘレネ・デムートによつて遂に中止を命ぜられたといふ逸話が殘つてゐる。駄辯りながらの散歩も彼は好きであつた。勉強してゐても時々立つて部屋を散歩した。散歩しながらも思ひついた事は、之をノートに留めて置くことを忘れなかつた。子供や友人と共に一日の遠出を試みる時などは恰も子供の様にはしやぎ廻つた。

煙草は殆んど手から離さなかつた。倫敦時代には金がなかつたので、安煙草を喫つた。これが不眠症を悪化せしめ、従つて彼の死を早めたらしい。酒についての記録はあまりないが「麥酒旅行」(Bierreisen)をやつて、三つの街燈をこはして警官に追跡せられた事があるのから見ればかなり呑んだらしい。リヤザノフのマルクス・エンゲルス傳の中には左の記事がある。参考までに紹介して置かう。「マルクスの賞讀者中の或者は、彼の酒に對する愛好(マルクスはモーゼル郡の産であつた)を容易に許し得たが、彼の止め度のない喫煙を容易に我慢し得なかつた。マルクス自身でよく『資本論』を賣つて得た報酬はそれを書いてゐる間に吸つた煙草の代にも値しない」と、冗談を言つてゐた。」

モスコ一のマルクス・エンゲルス研究所にマルクス筆の「告白」といふ一枚の斷片がある。これはかなりマルクスの性質をよく現はしてゐるから、その中の二三を紹介しよう。これは倫敦時代二人の娘の間に答へた英語の答案である。貴女の一番好きな徳は何かといふ問に「質朴であること」と答へてゐる。男の徳、女の徳として何が一番いいかといふ問に對しては、男には「強いといふこと」、女には「弱いといふこと」と答へてゐる。貴女の最も著るしい性質は何かといふ問に答へて「目的をたつた一つしか持つてゐないこと」と言つてゐる。好きな仕事は何かに對し

て「蠶魚の様に本をひたつて居る事だ」と答へてゐる。色は赤が好きだと書いてゐる。

マルクスは一生の中モットーとして守つてゐた句に二つある。一つは“Für die Welt arbeit”——世界のために働く——といふ句である。他の一つは有名なるダンテの句“Segui il tuo corso, e lascia dir le genti.”——汝の道を行け、そして人々をして言ふに任せよ——といふ句である。彼マルクスはこの二つの句をモットーとして六十五年の生を無産階級解放運動のために捧げたのである。

(後篇の資料としては、リーブクネヒト、ラファルグ、エリーナー等その他のマルクス追憶記による所多い。)

5850

畢

マルクス

昭和二十一年十一月五日印刷
昭和二十一年十一月十日發行

定價金五十圓

著者 石濱知行

發行者 東京都神田區淡路町一ノ一九
堀内文治郎

印刷者 埼玉縣比企郡大岡村上岡
中村榊

製本者 東京都神田區神保町二ノ二〇
徳住恒市

配給元 東京都神田區淡路町二ノ九
日本出版配給株式會社

發行所 二見書房

東京都神田區淡路町一ノ一九
振替東京一七二九四八番
電話神田(25)一三九〇番
日本出版協會會員番號△二〇六〇二三



816

年 月 日 2/8

開	開	開	開	開	開	開	開	開	開
開	開	開	開	開	開	開	開	開	開
開	開	開	開	開	開	開	開	開	開
開	開	開	開	開	開	開	開	開	開
開	開	開	開	開	開	開	開	開	開
開	開	開	開	開	開	開	開	開	開
開	開	開	開	開	開	開	開	開	開
開	開	開	開	開	開	開	開	開	開
開	開	開	開	開	開	開	開	開	開
開	開	開	開	開	開	開	開	開	開
開	開	開	開	開	開	開	開	開	開
開	開	開	開	開	開	開	開	開	開

民國二十二年二月八日

開

992

217₄

終

